

## ピア・サポート・トレーナー養成講座 3年目の取り組み —活動の定着と今後の発展に向けて—

山崎理央・橋本優花里・川人潤子・青野篤子  
(心理学科)

福山大学心理学科では、学生を主体としたピア・サポート活動に取り組んでいる。当初は初年次教育の一環として始まったこの取り組みは、ピア・サポート・トレーナー養成講座の開設へと進み、その3年目を迎えた今年度は学生メンバー・活動内容ともに発展がさらに一步進んだ。現在はこの活動を着実に軌道に乗せて継続させていくことが重要であるとともに、次の一步としては活動内容および活動の場を一学科内から学内全体の取り組みへ広げていくということ、新たな課題として視野に入れ模索している。本稿では養成講座3年目の取り組みと今後の課題についてまとめた。

【キーワード ピア・サポート活動 ピア・サポート・トレーナー 学習支援】

### はじめに

ピア・サポート、すなわち「援助のための訓練を受けた同年代の仲間が、問題に直面した仲間を支援する活動」(Cole, 1999 バーンズ・亀山・矢部訳 2002) や「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称」(西山・山本, 2002) を意味する取り組みが大学教育の場で広がってきている。もともとはカナダや米国など海外より発祥したピア・サポートは、仲間同士の支え合いの活動はもとより、支え合いの方法を具体的に習得するためのトレーニング・プログラムを導入することによって、学校現場における学生という資源を有効に活用する取り組みとなっている点も大きな特徴といえる(森川, 2002)。

福山大学心理学科においても、2004年度の学科設立当初からピア・サポート活動に着目し、初年次教育での仲間づくり・支え合いの基礎的スキル習得のためのワーク、さらには学科の学生が近隣の小・中学校等に出向き、そうしたピア・サポートの訓練プログラムのインストラクターとして活動する機会を学生に提供してきたことは、山崎・三宅・橋本・平・松田(2005)や青野・橋本・山崎(2013)、橋本・川人・山崎・青野(2014)等に述べられている通りである。

現在は、初年次の学生を対象としたピア・サポートの訓練プログラムの一部を2年次の学生がインストラクターとして担うことを体験し、それを経た3年次生以上の希望する学生が、さらに多面的にピア・サポート活動を行うトレーニングを一年かけて実施する。そのトレーニングを一定の条件のもとで経た学生は、下級生に対するそうしたトレーニングを担うスキルを備えた「トレーナー」として、学科において認定するという流れを構築した。この福山

大学心理学科の「ピア・サポート・トレーナー養成講座」(以下、養成講座)は2012年度より開設し、本稿作成時点の2014年度で3年目となった。初年次教育での取り組みが始まってからちょうど10年となる。

本養成講座の特徴はこのように、インストラクターである上級生や支え合いの仲間である同級生から支援される体験を経た学生自身が、今度は学生や学外の人たちを支援する側としても活躍する、複線系のプロセス(青野他, 2013)である。養成講座は、活動の一部で授業科目の時間を利用しているものの、正規の学科カリキュラムには含まれていない。養成講座へメンバーとして加わるのは自発的に参加を希望した学生である。本稿の筆者である複数の学科教員がコーディネーターとして参加し、学外の活動先との連絡等をカバーしているが、活動の企画・立案・実施は学生が「ピア・サポーター」として自主的に行う。

また、年間を通したトレーニングを経て「トレーナー」として認定された学生は、翌年度も引き続き養成講座に参加することができ、講座の運営や下級生メンバーのサポートを担う。メンバーは参加年数によって次のように位置づけている。すなわち、養成講座参加1年目のメンバー(3年生以上。4年次または修士1年次からの参加も可)は「ジュニア」と呼んでいる(厳密には年度末にジュニア・トレーナー認定を目指すメンバーであるが、実際には通称としてジュニアと呼ばれている)。年間の養成講座を終了し、学科で設けた条件を満たしたメンバーは、ピア・サポートの諸活動を有効に進める上で一定のスキルを備えたジュニア・トレーナーとして、年度末に学科長から晴れて認定を受ける。

さらなるスキルアップを目指して2年目も参加を続けるメンバー(4年生以降)は「シニア」(これも厳密にはシニア・トレーナー認定候補者)となり、ジュニア候補メンバーのトレーニングをリーダーとして担う。そしてのちにシニア・トレーナーに認定されたメンバーは、その自覚と誇りを持って、社会において何らかの形でピア・サポート活動に取り組んでいくであろうし、あるいは上級リーダーとして(この場合は必然的に大学院生である)、養成講座への3年目の参加も可能である。このように、学科による認定制度を設けることにより、参加学生の主体性とトレーナーとしての自覚を促し、学生同士や学科全体に、いわばピア・サポート意識というものを醸成し根づかせる方向に進んでいる。そしてこの方向性は、後述するように、大学全体、また学外および社会へ広がっていくことを期待したいところである。

### 養成講座3年目における変化と発展

2012年度に始まった本養成講座は、初年度においては当然、3年生・4年生・大学院修士1年生のいずれのメンバーも参加1年目であり、その意味ではトレーナーのモデル的存在である先輩もいないまま、手探りで講座を作っていったわけである。2年目の2013年度は、上述のように前年度の一年間のトレーニングを経てジュニア・トレーナーとなったメンバーたち

がリーダーとして加わり、新ジュニア候補メンバーはそのリーダーたちのもとでトレーニングを受ける環境が得られることとなった。それでもシニア候補メンバーにとっては、やはり先輩モデルのいない中でリーダーとしての役割を模索する一年間であった。そしてこの2014年度は、年度末にシニア・トレーナー認定者が初めて輩出したところで始まった。今年度のシニア候補メンバー（すなわち参加2年目のジュニア・トレーナー認定者）は、前年度に先輩メンバーとの関わりを持ちながら成長してきた。トレーナーの具体的なモデルがいる中で養成されてきたメンバーが、今度はリーダーを担っている。シニア認定の参加3年目のメンバーは（当初は参加があったが進路変更により転出となったため）現在のところはまだ不在であるが、本養成講座が主眼としている、先輩から後輩へと受け継がれるピア・サポートの流れがようやく構築されたことになる。こうした流れを受けて、この3年目における養成講座には次のような変化と発展が挙げられる。

1) 年度が進むにつれて養成講座の参加者が徐々に増加しており、初年度は16名、2年目は18名、そして3年目の今年度は22名となっている。実は心理学科には、本養成講座以外にも学生の集団活動が複数存在している。学生たちの個人的なつながりでできたグループはもちろんのこと、授業や実習での正規のカリキュラムにおけるグループ作業だけでなく、学科の建物周辺の環境を改善し活性化する方策を話し合う学生サークルなどさまざまにある。本養成講座もその中の一つの存在ということになり、約200名の学科全体からすると希望した一部の学生のみが活動しているものに過ぎないともいえる。しかし、ピア・サポート活動に携わるメンバーのモデルが増えてきたことにより、学科の学生たちに養成講座の活動に対する認知が高まってきたことが考えられる。また、心理学科では近年、留学生も増加傾向にあるが、今年度より留学生も初めて養成講座のメンバーに加わった。これから留学生同士にもこの活動が浸透していくことが期待される。

2) 大きな環境の変化としては、昨年度末に心理学科の建物が大学敷地内の別棟に移転することになった。もともと入っていた別の学科が新築棟に移転したことによるものだが、これにより新たに、ピア・サポート活動専用の一室を確保することができた。ここで養成講座のミーティングを行えるほか、この部屋を「ピア・サポート・ルーム」として学科の学生にも開放した活動に利用できる余地が生まれた。

3) 上記の1)にも関連して、学科内での養成講座メンバーに対する活動のニーズが、その活動の認知の高まりとともに増えてきた。学科の行事でピア・サポートにまつわる活動の紹介をする際には、教員の同席がなくともメンバーに直接任される機会が増えてきたし、サポートの一環として後述するような学生同士での学習支援の担当ニーズも生まれた。さらには、学外からのピア・サポート訓練プログラム実施の派遣依頼についても、これまでの派遣先からの継続依頼をいただいていることに加え、新たな派遣依頼も増加・多様化傾向にあり、これら学外からの派遣依頼は、単一の行事としての実施だけでなく、年間を通しての継続的な

実施依頼も出てきた。また参加メンバーの増加により、それらにある程度応じることが可能になったことも今年度の変化である。

4) 上記に関連して今年度は、年間を通したトレーナー認定の条件として、これまでの条件を若干アレンジすることによって、より充実したトレーニング内容にシフトすることにした。これまでは青野他 (2013) にあるように、学内での初年次教育でのピア・サポート訓練のインストラクター (前期半年間) に加え、もう一つの学内あるいは学外のプログラムに参加し実施のトレーニングを行う (さらに年度はじめおよび夏休みの事前学習・事後学習に参加する) ことが、年度末の講座修了時のトレーナー認定条件であった。それに対して今年度は、以下の A・B の2つのカテゴリーから、それぞれ1つ以上の活動に携わることを認定条件とした (表1)。

表1 2014年度の養成講座におけるカテゴリー別の活動内容

A	・教養ゼミ (初年次教育におけるピア・サポート訓練) のインストラクター◇ およびピア・サポート・ルームの運営検討◆ ・心理学科生への学習支援◆
B	・大学の新生合宿におけるピア・サポート訓練◇ ・A 高校の新生合宿への出前研修◇ ・B 高校の新生合宿への出前研修◇ ・ひきこもりがちな若者支援のNPO法人への出前研修◆

◇単一行事または期間限定, ◆年間継続

5) メンバーの増加, および活動内容・活動数の増加により, メンバー間での連絡・伝達をより確実に行えるようにする必要が生じた。そのため, 今年度より養成講座メンバー専用のメーリング・リスト (ML) を設けた。主にミーティングの開催日時の連絡のほか, 派遣先での活動報告にも活用されている。このようなオンラインツールの利用は, それぞれスケジュールの都合や立場の異なる関係者全員の間でのコミュニケーションを円滑にし, 一定の情報を共有し, 意見を交換する上で有効な一助になると考えられる (佐々木, 2013)。

6) 上記の3) および4) に関連して, ピア・サポートの活動内容が充実してきたことから, いずれは学科内での活動の定着をベースとして, 学科を越えた学内全体の学生を対象としたピア・サポート活動の広がりを視野に入れようという機運が, 養成講座を担当する教員間に生まれてきた。そこで, 将来的な活動全体のイメージとして次のような二つの活動を柱とした組織を想定し, 今後の発展に備えることにした。一つは, これまで主眼としてきた学生同士の支え合い・仲間づくりの活動を一方の柱とする。そして学生同士での学習支援等をもう一方の柱に置いて, さらにこの両者を統括して活動全体をコーディネートする上級リーダー

を置くというものである(後述)。今年度より新たに活動内容に加えた学習支援(上記4)に挙げたカテゴリ-Bの1つ)は、この模索の一環としての意味合いも含んでいる。

### 養成講座3年目のプログラム内容

養成講座の年間の活動は、青野他(2013)、橋本他(2014)に紹介されているような前年度までと同様、以下の流れとなっている。

- ①事前学習：春休み研修
- ②前期の活動：ピア・サポート活動のトレーニング(計画・立案・実施、後輩の指導等)
- ③事後学習：夏合宿
- ④後期の活動：ピア・サポート活動のトレーニング(計画・立案・実施、後輩の指導等)

ここでは今年度の養成講座プログラムの内容を、学内・学外の活動それぞれに分けて紹介する。その中で特に今年度から新たに加わった活動内容については詳しく触れることにする。昨年度以前より継続している活動内容については、詳しくは青野他(2013)および橋本他(2014)を参照いただきたい。

#### 《学内での活動》

##### 1. 春休み研修

年度替わりの活動の区切りとして、昨年度末の3月25日に終日かけて実施した。これには本稿の筆者らである担当教員と、新たに今年度の養成講座受講メンバーとなった学生たちだけでなく、2月19日の学科主催の認定式にて2013年度の養成講座修了認定を受けたメンバーも参加した。そのうち複数名が今年度も引き続き養成講座にリーダー(シニア・トレーナー候補者)として参加する意思を示した。



写真1 春休み研修の様子

この研修では、メンバーたちの自己紹介をはじめ、教員やリーダーたちがピア・サポートの意義や活動紹介のレクチャーをしたのち、種々の活動の担当者の決定、直近の活動予定の打ち合わせや前年度から継続する活動の引継を行い、新年度のスタートを切った(写真1)。活動をより円滑に進めていくために、学科の建物内への掲示板の設置、メンバーが活動中に身につける名札や名刺の作成、連絡の便宜をはかるMLの開設を決めた。

## 2. 教養ゼミでのインストラクター

1年次生の初年次教育科目で、心理学科では学科設立当初からピア・サポート訓練のプログラムを前期の期間に週替わりで組んでおり、養成講座のメンバー全員が「ピア・サポーター」となってインストラクターを分担している。新入生オリエンテーション合宿の中にその第1回として、コミュニケーションを促進するワークを組み込んで実施し、新入生が同級生とのつながりを得て大学生活になじんでいくサポートを行った。前期の期間を通した関わりは、新入生と上級生が顔見知りとなり、お互いの関係作りのよい機会ともなっていた。

## 3. ピア・サポート・ルームの活動

昨年度に引き続き、心理学科生を対象としたピア・サポート・ルームを心理学科施設内に開設した。ピア・サポート・ルームとは、居場所づくりの機能があるものであり、特に福山大学心理学科のピア・サポート・ルームは、「学生同士が気軽に集まり、知り合いになり楽しく交流できる(ひいては互いに学生生活でサポートしあう関係を築くきっかけとなる)機会の提供をめざすこと、またそのような機会をどのような形で呼びかけ、どのような頻度で行うことが可能かを探ることを目的」(橋本他, 2014)として開設された。ルームの開設2年目となる今年度は、メンバーが主体となり、学科学生を対象とした複数の行事を企画・運営した。以下に今年度実施の活動を記す。

### 1) 履修登録のサポート

4月には、履修登録期間中の数日間にわたって新年度の履修登録のサポートを行った。養成講座メンバーの中からピア・サポーターとなる担当者を決めて日ごとに分担し、昼休み以降にルームに常駐した。また、履修登録サポートの広報活動として、新年度の各学年オリエンテーションにおいて、開催期間や場所等を記したチラシを配布した。複数名の新入生や2年生が利用し、履修登録の円滑化や学生同士のつながりの形成が促進されたと感じる。

### 2) 1年生対象のカレーパーティ

7月には、初年次教育の教養ゼミの前期15回が終了した時点において、心理学科1年生および教員を対象としたカレーパーティを開催した。教養ゼミは固定の小グループに分かれて実施されるため、1年生同士でもグループが異なると顔を合わせる機会が少ない。そのため、

カレーパーティを通して、1年生同士の交流を深めることを目的に実施した。料理の準備や会場の設営などの運営をピア・サポーターが行った。半年間の大学生活における出来事や反省などを語り合い、学生や教員の交流の場となった。

### 3) ハロウィンでのPR活動

10月のハロウィンには、心理学科生を対象として、ピア・サポート活動や養成講座の紹介と、来年度の新規メンバーの勧誘を兼ねたPR活動を実施した。ピア・サポーターは各々好きな衣装をまとい、無料で菓子を配布した(写真2)。本活動がピア・サポート活動の広報となり、新規メンバーの開拓につながることが期待される。

これらの活動を通して、ピア・サポート・ルームの周知ならびに新規メンバーの開拓が行われるようになった。ピア・サポーターの変化として、学生がより主体的に企画の立案を行い、担当を分担して運営することができるようになった。学生主体のピア・サポート・ルームという位置づけがピア・サポーターの中で形成され始めているように感じる。いずれはこの活動のさらなる広がりが期待されるが、まずは学科内において、ピア・サポート・ルームのさらなる周知と活用の充実が期待される。

課題として、広報活動を通して活動の幅を広げるピア・サポート・ルームのために、利用規則(ピア・サポーターや教員の位置づけや禁止事項など)や目標など、学生と教員の共通理解を図ることが必要と感じる。



写真2 ハロウィンでのPR活動の様子

### 4. 学習支援の活動

今年度、心理学科の新しいピア・サポート活動として学習支援が始まり、養成講座のメンバーがピア・サポーターとして、学生の立場で携わることになった。仲間同士の学び合いを軸に展開される学習形態は、教育心理学の視点から、ピア・ラーニングとも呼ばれ(Topping, 2005), 教科における学習のみならず、社会性と情動の学習(social emotional learning)が促進

されることが報告されている (Ginsburg-Block, Rohrbeck, Lavigne & Fantuzzo, 2008)。

心理学科のピア・サポートによる学習支援は4月に始まり、週に1度、心理学関係の授業理解のサポートを大きな目標として行われている。サポーターは前期4年生3名、3年生9名であり、後期では4年生1名と3年生4名であった。主な支援内容は、「心理学実験実習」のレポートの書き方であり、後期の最初には「心理学統計法」の授業で課題が出されたことから、その内容についての支援を求めるものもあった。このほか、学習支援担当の学科教員2名がおり、これら教員による心理学検定の受験に向けた学習支援もこの学習支援と同時に行われていた。

学習支援の開始にあたっては、チラシなどで下級生に呼びかけたものの、利用者は前期2年生8名、3年生1名であり、後期では2年生7名であった。各人の利用頻度は1回から数回程度が最も多く、前後期通じて常に参加しているのは1名のみであった。

学習支援では、当初シニアのメンバーである大学院生1名が中心となっており、レポートの見方などを統一するためのチェック表の作成やサポーターのシフト表の管理をするだけでなく、学習支援の現状の分析と改善方法の検討を行っていた。しかしながら、後期ではその院生が担当を外れたこともあり、積極的な支援方法の検討などがなされないままとなっている。また、上述のように、継続して参加する学生は1名と少なく、後期中盤からはその学生1名のみが常に参加している状況となっている。

このような状況は、サポーターが自らの活動を振り返り、改善をしていくという姿勢を生みにくくしていると考えられる。とはいえ、利用者が低迷している現在、本来であれば、学習支援の在り方や活用の増加を目指した試みなどが話し合われるべきであるが、現在のところそのような動きは学生の方からは見られない。サポーターである学生は3年生と4年生であり、それぞれのゼミでの研究が忙しくなっているため、そのことが改善に向けた取り組みの積極性を妨げているのかもしれない。しかしながら、サポーターにおいては、他の節で述べられているように、単発的な行事は積極的に計画し楽しむ様子も見られている。このような状況は、サポーターの計画性の乏しさを浮き彫りにするものであり、サポーターへの指導の在り方を検討すると同時に学習支援そのものの在り方を教員主導で再考する必要性を示唆するものであると考えられる。

近年、学生の学習支援については、様々な書籍や論文が出され、その取り組みが報告されている。その多くでは、サポーターの学生のスキルアップとしての定期的ミーティングの開催やスキルの認定のほか、支援の画一化を目指したチェックリストの考案や事例集の作成などが行われている。また、谷川・石毛(2014)は『ピアチューター・トレーニング』と題したワークブックを出版し、学生による学生支援の養成に特化した内容を教示している。福山大学心理学科の学習支援においても、このようなワークブックや他大学の取り組みを参考にして、サポーターのスキルアップと組織性の向上を目指さなければならず、そのためには教



員の積極的関与が必要であろう。

## 5. 夏合宿

前期の活動を振り返り、後期の活動をより実りあるものにするための研修を、夏休みに合宿形式で例年実施している。今年度も9月4日・5日に1泊2日の研修を県内のキャンプ施設にて行った(写真3)。両日の研修をはさんで1泊目の夕食はバーベキューパーティを設けた。これによりメンバー同士および教員との親睦を深め、協力関係を高める機会となった。

研修では、今後の出前研修の機会に備えて新たな研修内容の検討を、小グループでのディスカッションとプレゼンテーションにより進めた。メンバーの司会・進行で、レクリエーションのアイデアを出し合った。また、例年の夏合宿で実施していることであるが、それぞれ他のメンバーに向けての思いを綴る手紙を書いた。



写真3 夏合宿の様子

### 《学外での活動》

#### 1. 近隣の学校への出前研修

養成講座が開設される以前から、心理学科の複数のゼミが近隣の小中高校へピア・サポート訓練の出前研修を提供する活動が続いてきた。現在も要請をいただいた学校へ養成講座の一環としてプログラム実施を続けている。

今年度は2つの高等学校から、以前と同様に4月に実施される新入生合宿の日程の一部としてピア・サポート訓練の実施依頼があった。担当メンバーが事前に高校に出向いて教員と実施内容の検討や段取りを打ち合わせる場所から実施まで進めていった(写真4はプログラムの一場面)。高校生たちは、チームで協力するゲームの要素のあるワークに楽しく参加している様子であり、始まって間もない高校生活における友人作りのきっかけに役立っているようだった。担当メンバーは前年度のプログラム内容や段取りを改善し、ピア・サポーターとしての手応えを感じていた。



写真4 ある高校の合宿研修の一場面

## 2. ひきこもりがちな若者を支援する活動への参加

ひきこもりがちな若者の就労・学修支援を行っている NPO 法人（福山市内に 2012 年に設立され、翌 2013 年に法人化）からの依頼により、今年度から、ピア・サポート訓練の出前、またはこの団体がすでに実施しているプログラムへの協力参加をすることになった。この団体は、「仕事をしたい」「学校へもどりたい」など自立へ向けた悩みをもっている若者（高校生から 40 代以上まで）に対して、フリースペースの提供、IT スキルアップを中心とした講座の開催や受託した仕事を一緒にこなしてもらう中間的就労の場も提供している。この団体のニーズとしては、大人目線での講座やプログラムを実施しても参加者の抵抗が強いため、若者と同年代の大学生に独自のプログラムを考案してもらったり、すでに団体で実施しているコミュニケーション講座にファシリテーターとして参加してほしいとのことであった。

6 月に担当メンバーの代表が NPO 法人を訪問し、その代表と打ち合わせを行った。以後、9 月以外は毎月 1 回土曜日に訪問して活動を行っている。毎回の活動には 7～9 名の施設利用者が参加している（メンバーは固定していない）。ひきこもりがちな人たちが社会と関わりをもつようになるためには、家族から仲間同士の関係作りへ、そして集団に適応していくための訓練が必要となる（内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室、2011）。そこで、プログラムの実施にあたっては、非言語コミュニケーションから言語的コミュニケーションへ、個人間の関係から集団との関係へと徐々に進むように配慮した。参加者の感想として、「リラックスしてとりくめた」「新鮮な感覚で楽しかった」「コミュニケーションの壁がとれたような気がする」などがあり、ファシリテーターの学生たちも、成人が含まれる集団への訓練に戸惑いながらも、参加者からのフィードバックから学ぶことも多かったようである。

毎回 3～4 名の学生がファシリテーターとして参加したが、1 名以外は毎回入れ替わったため、活動の継続性が損なわれたことは否めない。また、大学側と団体側との連絡調整が十分

にできなかったため、参加学生は活動のねらいや団体のニーズを把握するのが困難だったと言える。来年度に向けて、大学生が参加することの意義を明確にし、参加者の特性に合わせたプログラムの立案についても学内でトレーニングしていく必要がある。

### 養成講座の課題（今後の継続と発展に向けて）

学科の学生たち全体の中にピア・サポートの精神が広がり、互いに支え合う人間関係を築いていくながら、大学生活をより充実したものにしていくこと——これがこの活動の意義のひとつとすれば、さらにもうひとつ、養成講座のメンバーたち自身にとっても、次のような意義があってほしいと願っている。すなわち、より積極的にコミットしてこの活動を進めていくことに関心と意欲のある学生に、その中心的役割と責任を担ってもらう機会を与え、それが学生たちにとってひとつの“居場所”ともなり、活動を通してさまざまなスキルやリーダーシップを磨いてもらうことである。これまで見てきたように、福山大学心理学科におけるピア・サポート訓練の活動、そしてその活動を担うトレーナーの育成を目的として3年目に入った養成講座の取り組みは、一歩ずつではあるが、その歩みを前に進めてきた。この歩みをさらに意義あるものとして継続させ、さらに発展を目指す上での課題を以下に整理しておきたい。

#### 1. プログラム等の参加者・受け手に関する課題

養成講座のプログラムとして組み込んでいる種々の活動、すなわち学内・学外におけるピア・サポート訓練のプログラムが、実際に受け手の参加者に役立つものになっているかどうかは、プログラムが第一に受け手のためのものである以上、問われねばならない。これについては、教養ゼミや高校での出前研修では参加者に振り返りシートやアンケート調査への記入を求め、その結果を取りまとめて検討しているほか、継続的な活動においては各回の参加者の反応・様子を吟味したうえで次の活動に臨むということを重ねている。また、前年度から引き続き派遣依頼をいただくケースも、活動が評価されたという点で学生にも励みになっている。しかし、活動の受け手に対する具体的な効果を測定するなど、今後どのような形でそれを把握してプログラムの改善に生かすかということは、引き続き課題として残されている。

#### 2. 活動の内容や進め方に関する課題

上記の1.とも関連して、受け手により役立つ、意味のあるプログラムを提供するための方法を探ることはもちろん、一つひとつの活動をスムーズにこなしていくことは、基本的なことではあるが実は学生たちにとってそれ自体チャレンジである。ジュニア・シニアのメンバ

一構成が制度として整ってきた中で、先輩から後輩へのノウハウの伝達や、モデリングを通しての学びは年度を重ねるごとに向上してきている。しかし依然として、メンバー間での役割分担の共有や、作業の段取りをきちんと組むこと、メンバー間での連絡のやりとりをきちんと行うといったことは、MLの導入により改善された部分もあるとはいえ、まだ十分に確立されているとはいえない。また、今年度はいくつかのグループに分かれて活動する機会が増えているが、それらの活動をメンバー全体で共有するように心がけておく必要が出てきた点や、学習支援の項でも述べたように各々の活動グループ内で運営の改善をしっかりと吟味していく必要性も挙げられる。単発の行事のアイデアを継続的なものへと高めることや、楽しむ行事を支え合いにつなげるきっかけとして生かすこと、このあたりは本講座の目標をどこに置くかということと関わってくる点であり、メンバーおよび教員で今後も深く検討していくべきであろう。

### 3. 養成講座メンバー自身に関する課題

養成講座へは開設当初より自主的な参加を前提としていることから(青野, 2013), メンバーを構成しているのは活動に対して一定の意欲や動機づけのある学生たちであり、参加メンバーたち自身のそうした意欲や動機づけは活動の原動力である。一方で、養成講座は先に述べたように、学生たちにとって“居場所”のひとつという意味も持ちうる。すなわち、学科の他のメンバーとつながり、ひとつの立場や役割を得ることが、メンバー自身の支えとして機能するわけである。その意味で、ある程度の動機づけは自主的な参加ということから担保されるものの、活動の中でどれほどの意欲や積極性を持つかという点ではメンバー間に差が見られるようである。昨年度(橋本他, 2014)の向上点として挙げられたメンバーの自発性は今年度もさらに伸びが見られ、活動の企画やアイデアがメンバー間で積極的に交わされている。その反面、一部の積極的なメンバーとそれに受動的に従っているメンバーという構図が固定されがちな印象を担当教員間では抱いている。

藤原ら(2013)の調査研究にあるように、ピア・サポート活動に関わる学生にとって、所属するグループの居心地のよさや、そのグループの存続を願う気持ちといった要因は、活動を続ける動機づけに大きく関連しているようである。講座の活動を安定的に継続させていくためにメンバー数の確保は重要であり、学生のひとつの“居場所”としての側面や、活動への参加をきっかけに意欲や動機づけを次第に高めていく可能性にも目を向けると、その門戸はある程度広く設定するのが望ましいだろう。また、学業はもちろんサークルやアルバイトなど多忙な中で、活動が過度に負担にならないための配慮も必要である。その一方で、メンバーの役割意識と責任感を育てることや、それぞれの持ち味を見つけて伸ばし、リーダーシップを高めるということ、うまく両立させていけるかどうかが重要である。

本学科におけるピア・サポート活動および養成講座の開始当初の理念が、当のメンバー間

にどの程度根づいているか。これは年度はじめの春休み研修で共有しているものではあるが、年度の活動を通して折々に立ち返ることが必要かもしれない。すなわち、「ピア・サポートの」および「トレーナーの」養成講座であるという点である。先述したメンバーの自発性に加えて、メンバー同士での支え合い、シニアとジュニアの立場の間でのコミュニケーションがより育ってほしいという点は、昨年度からも引き続き課題として挙げられる。ピア・サポートの力をベースに、自らのスキルや経験を磨いて問題解決力をつけ、「トレーナー」として成長する、この観点からの目標をより明確化してメンバー間で共有してほしい。これについては、メンバー個人の到達目標を具体的に掲げ、到達度をルーブリック形式で評価できる評価用紙の開発を進めていきたいと考えている。

#### 4. 養成講座およびピア・サポート活動の場に関する課題

はじめにでも述べたように、本養成講座ではこの活動を通して、一人と一人の関係に生まれたピア・サポートの精神が複数の学生たちから学科全体へ、そして学外での活動を通して関わった人たちの周囲とのつながりの中で、さらにはトレーナーとして育った学生がいずれ巣立った先や社会全体へ、と広がっていくことを大きな眼目としている。このことから、現在は担い手を心理学科の学生に限っている現在の活動が、いずれは学科を越えて大学全体の学生を対象としたものへ発展できないかということが、活動に携わっている教員間で新たな問題意識として出てきた。

これについては、近年の大学教育の活性化への取り組みの一環として、ピア・サポートに限らず他のさまざまな側面からを含めた、学生同士による支援を活用する動きが注目されてきている。たとえば愛媛大学における、教職員の支援のもとで活動する学生主体の教育活動制度(泉谷・山田, 2013) や、法政大学における、教職員と協働で活動する学生スタッフによる複数の部局にわたる組織(佐々木, 2013)などがその例であり、それらの活動の幅は生活・学習・就職と多岐にわたっている。沖縄・名護市の名桜大学における学生支援のプログラムも注目すべき取り組みである(名桜大学, 2012)。新入生支援の仕組みとして言語学習および数理学習を受け持つそれぞれのセンターを設置し、常駐の学生スタッフが運営に携わる。これに新入生の大学適応、就職活動支援を受け持つそれぞれの学生ボランティア団体も連携して、先輩・後輩コミュニティを基本とした総合的な学生支援のシステムが構築されており、この取り組みは文部科学省の平成21年度大学教育・学生支援推進事業(テーマB)に選定されている。これらの優れたモデルも、福山大学心理学科における現在の取り組みの将来的な方向性を検討していくうえで参考になると考えられる。

なお、今年度より本養成講座の現在の取り組みにおいて学生生活支援・学習支援の両面を含む形で進めていることは、今後スタッフとして受け入れる学生の対象を全学に広げる場合の見通しやモデルを得ていく布石でもあるといえる。今後の形として考えられる組織構成と

しては、この学生生活支援・学習支援の両者をより安定した軌道に乗せ、組織化する。前者は現在の取り組みにおけるピア・サポート訓練（仲間作りや支援関係促進）およびピア・サポート・ルーム（新入生の履修支援等）に相当し、「サポーター」がこれを担う。一方、後者は現在の学習支援に加えてレポートや論文のライティング（読み書き）支援を位置づけるものであり、「チューター」として学生が関わる。さらに、この両者を統括する大学院生を「メンター」として、サポーターやチューターの指導に携わる、というものである。

このような、ピア・サポートを組み込んだ形での多岐にわたる学生主体・学生相互の支援が有機的に連携する仕組みの構築に際しては、さまざまな課題と労力もちろん予想される。本講座の活動を4年目以降に向けて安定した軌道に乗せつつ、この取り組みが学生の学習や成長へのモチベーション向上、彼らの大学生活をより有意義なものにしていくことに寄与し、ひいては大学全体の活性化につながっていくことを期待したい。

## 引用文献

- 青野篤子・橋本優花里・山崎理央 (2013). 大学におけるピア・サポート活動の新たな展開 福山大学人間文化学部紀要, **12**, 85-93.
- Cole, T. (1999). *Kids helping Kids*. Victoria, B.C. Canada: Peer Resources.
- (コール T. バーンズ亀山静子・矢部 文 (訳)(2002). ピア・サポート実践マニュアル 川島書店)
- Ginsburg-Block, M., Rohrbeck, C., Lavigne, N., & Fantuzzo (2008). *Peer-assisted learning: An academic strategy for enhancing motivation among diverse students*. In C. Hudley & A. E. Gottfried (Eds) *Academic motivation and the culture of school in childhood and adolescence*. New York: Oxford University Press, Pp.247-273.
- 藤原美聡・石田 弓・兒玉憲一 (2013). 大学生のピア・サポーターにおける活動動機に関する調査研究 総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集, **29**, 25-34.
- 橋本優花里・川人潤子・山崎理央・青野篤子 (2014). ピア・サポート・トレーナー養成講座の発展——2年目の取り組みと今後の課題—— 福山大学人間文化学部紀要, **14**, 121-136.
- 泉谷道子・山田剛史 (2013). 体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長 大学教育実践ジャーナル, **11**, 61-67.
- 名桜大学 (2012). 平成23年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマB】学生支援推進プログラム 先輩・後輩コミュニティを基本とする学習支援センターの構築 事業報告書 公立大学法人名桜大学
- 森川澄男 (2002). ピア・サポートとは (理論編) 中野武房・日野宣千・森川澄男 (編著) 学

校でのピア・サポートのすべて ほんの森出版

内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室 (2011). ひきこもり支援者読本

< [http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/handbook/ua\\_mkj\\_pdf.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/handbook/ua_mkj_pdf.html)

2014年11月17日参照 >

西山久子・山本 力 (2002). 実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向 岡山大学  
教育実践総合センター紀要, **2**, 81-93.

佐々木健太 (2013). 大学ピア・サポート制度における e ポートフォリオ導入に関する一考察  
異文化 法政大学国際文化学部, **14**, 197-205.

谷川裕稔・石毛 弓 (2014). ピアチューター・トレーニング学生による学生の支援へ ナカ  
ニシヤ出版

Topping, K. J. (2005). Trends in peer learning. *Educational psychology*, **25** (6), 631-645.

山崎理央・三宅幹子・橋本優花里・平 伸二・松田文子 (2005). 大学生へのピア・サポート訓  
練による自尊感情や自己開示, 社会的スキルへの効果の検討 福山大学人間文化学部紀  
要, **5**, 19-29.

## **Three year review of training program for “peer-support” activities**

Rio Yamasaki, Yukari Hashimoto, Junko Kawahito and Atsuko Aono

The Department of Psychology at Fukuyama University has a year-long program for training student volunteers to conduct “peer-support” activities which promote mutual support among students and local people. Three years into this program, the number of student participants has increased and the contents of the program have become more substantial. This paper reports on the program’s activities and discusses future potential and challenges. It is important that the Department of Psychology manages the program well so that activities continue steadily and sustainably for many years. In contrast, currently only students of this department can take part in the program. The authors think that extending the program to include students from other departments in the near future will be a step forward in developing the program’s activities.

**Key words:** peer support activities, peer support trainer, learning support